

農林水産大臣賞受賞

みんなで取り組み、みんなで作る、
なごやかな田沢頭のむらづくり

たざわがしらじちかい

受賞者 **田沢頭自治会**

やまがたけんにしおきたまぐんおぐにまち
(山形県西置賜郡小国町)

■ 地域の沿革と概要

田沢頭集落がある小国町は、山形県の西南端に位置しており、朝日連峰、飯豊連峰の雄大な山並みに包まれている。総面積は 737.55 k m² と県内で 2 番目の広さを有している。この広大な町土の約 90% が森林であり、そのうち約 80% をブナの天然広葉樹林が占めている。

この地域は日本海側気候の影響を受け、夏は雨が多く、冬は積雪が町中心部でも 2 m を超え、山間部では 5 m に及ぶところもあり、全国有数の豪雪地帯である。

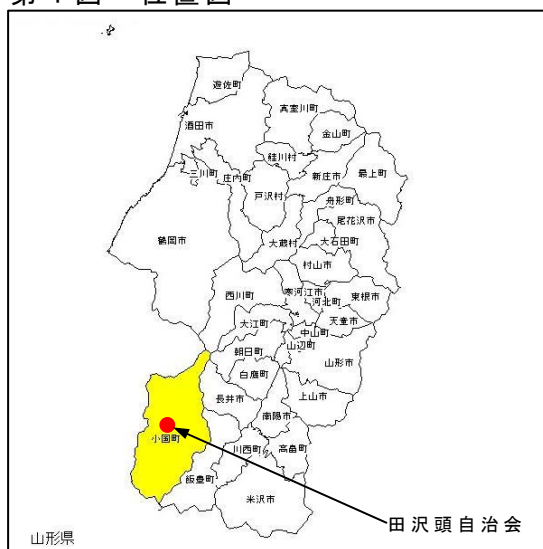
人口は、昭和 30 年の 18,366 人をピークに年々減少を続け、平成 21 年 4 月で 9,240 人と半減している。また、老年（65 歳以上）人口割合は 33.1% で年々増加し、県内でも高い状況にある。

産業別の就業者数は、昭和 35 年の 8,339 人に対して、平成 17 年は 4,626 人と大幅に減少し、第 1 次産業から第 3 次産業への移行が進んでいる。

農業をみると、農家戸数が昭和 40 年の 1,565 戸に対して、平成 17 年は 584 戸と急激な減少が続き、経営耕地面積も昭和 40 年の 1,623ha に対して、平成 17 年は 806ha と半減している。

厳しい気象条件や山あいの小規模

第 1 図 位置図



※ 白地図 kenMap の地図画像を編集

第 1 表 地区の概要

事項	内容	
地区の規模	集落	
組織の性格	地縁的な集団	
農家率 (内訳)	47.2 %	
	総世帯数	36 戸
	農家数	17 戸
販売農家数 (内訳)	17 戸	
	専業農家	1 戸
	1 種兼農家	4 戸
	2 種兼農家	12 戸
主要作目 (作付面積等)	水稻	26.6 ha
	野菜	- ha
	肉用牛	304 頭
農用地の状況 (内訳)	耕地計	34.8 ha
	田	32.8 ha
	畑	1.4 ha
	樹園地	- ha
	耕地率	11 %
	農家一戸当たり農用地面積	2.0 ha

な経営耕地など、農業生産には恵まれない不利な条件ながらも、比較的平場の水田では基盤整備が進み、水稻を中心とした農業が営まれている。また、地形条件を活かしたワラビやゼンマイ、茸類などの山菜を始め、「おぐに五穀の会（町内の雑穀生産者と雑穀利用者による組織）」を中心とした雑穀の生産拡大が見込まれている。

■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

田沢頭集落は、小国町の中心部から北に約 2 km 離れた場所に位置する山間集落である。世帯数 36 戸、人口 119 人で「みんなでつくろう なごやかなむら」をテーマに、住民一丸となった全員参加のむらづくりに取り組んでいる。

集落内には、小国町中心部を流れる荒川の上流部にあたる前川・田沢川の 2 つの川が流れており、昔から「川をきれいに保とう」など、環境保全に対する意識の高い集落であった。集落の様々な取組みの背景には、この環境保全に対する意識の高さがあるものと考えられる。また、集落にはブナをはじめとした広葉樹林が広がり、昔は炭焼きが盛んな地域でもあった。

昔から水不足や洪水に悩まされてきた集落にとって、昭和 20～30 年代に整備された「田沢頭ため池」は地域の水源であり、住民の宝として大きな存在となっている。昭和 59 年には、このため池が改修され、河川の改修も行われたことから、より安心な暮らしができるようになった。

主要な作物は水稻であり、作付面積 26.6ha のうち 21ha では、8 名のエコファーマーが木酢液を使った特別栽培米「おぐに木酢米」等を生産している。

また、近隣集落と同様に、少子高齢化が課題になる中、女性が中心となって雑穀の生産・加工等に取り組む、生き活きとした元気なむらづくりを進めている。

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

ア 田沢頭自治会の発足（昭和 54 年～）

田沢頭集落は、昭和 45 年頃から農業後継者の多くが現金収入を求めて町中心部の企業に就職したこともあり、農業離れや第 2 種兼業化が進み、非農家世帯が増加していった。

また、戦前から戸主制度の体質が強く、集落の行事や議決事項は世帯主だけで決定され、戦後移り住んできた住民には発言権が与えられていなかった。

こうした状況から、自治活動の停滞と連帯意識の低下、さらには生活全般にわたる住民の不安や集落機能の衰退が懸念されていた。

このような中、青年層が立ち上がり、むら組織の見直しを呼びかけ、戦後移り住んだ人も含めた地区住民総意のもと、昭和 54 年に「みんなでつくろう なごやかなむら」をテーマとした新たな体制によるむらづくりがスタートした。

昭和 55 年には、集落の拠点として「田沢頭集落センター」が整備されたことを契機に、これまでの総代会を廃止し、集落全世帯で構成する「田沢頭集落

なってワークショップを開催したり、アンケート調査を実施した結果、150項目にも及ぶ提案が出された。この提案を、すぐに実施できるもの、2～3年後に実施するもの、5年後、10年後の実施を目指すものなどに区分するとともに、農地の活用、環境保全、食などの10のテーマ別に整理し、自治会の新たなむらづくりの活動計画として取りまとめた。



写真2 ワークショップの実施

また、この活動計画を実践するにあたり、農業者を中心とした「田沢頭グリーンネット（以下「タグネット」という。）」を立ち上げ、住民が一体となって豊かで魅力あるむらづくりに取り組んでいる。

(2) むらづくりの推進体制

ア 田沢頭自治会の組織体制と構成員

自治会は、全世帯36戸が加入する組織であり、4つの専門部（総務部、産業部、教養部、生活厚生部）により事業を行っている。

主に、拠点施設の整備や里山整備、健康づくり、伝承文化の継承、安全確保等は自治会の活動と位置付けており、具体的には、各部において以下のような取り組みを行っている。

産業部では、特別栽培米の生産や雑穀の栽培技術の向上を目的とした取り組みを行い、生活厚生部では、高齢者との交流や健康づくりのほか、プランターへの花植えなどを行っている。

教養部は育成会、力行会^{りっこうかい}、青年会、老人クラブ、若妻会で構成され、育成会による清掃奉仕活動や老人クラブによる環境美化活動のほか、若妻会による料理講習会などの取り組みを行っている。

また、次世代を担う若い衆の集まりである力行会は、集落行事の取り決め等を行っているが、構成員が必ず順番で役職を担うなど、むらづくりを進めるための能力獲得の場として有効に機能しており、自治会運営の後継者を育成する役割も担っている。

イ タグネットの組織体制と構成員

農地・水に関する活動を行うタグネットの構成員は、農地・水の対象農用地で耕作を行う農業者と、集落内の非農業者等で構成されており、自治会も構成員となっている。

農地・水の農業・農村環境に関する活動は、自治会や森林生産組合、改良区維持管理組合、農業振興組合、駐在員、消防団など、集落内全員参加により取り組んでいる。

また、農地・水の共同活動による農地・農業用施設の保全管理は、集落内の農家と自治会の教養部が取り組んでおり、遊休農地の解消や雑穀などを活用し

た農業体験は、自治会の教養部・生活厚生部の女性たちが中心になって取り組んでいる。

地域内のフラワーロード整備、チョウセンアカシジミ（山形県の天然記念物にも指定されている希少なチョウ）や蛍の生育環境整備、他地域との交流活動も自治会の教養部・生活厚生部が中心になって取り組んでいる。

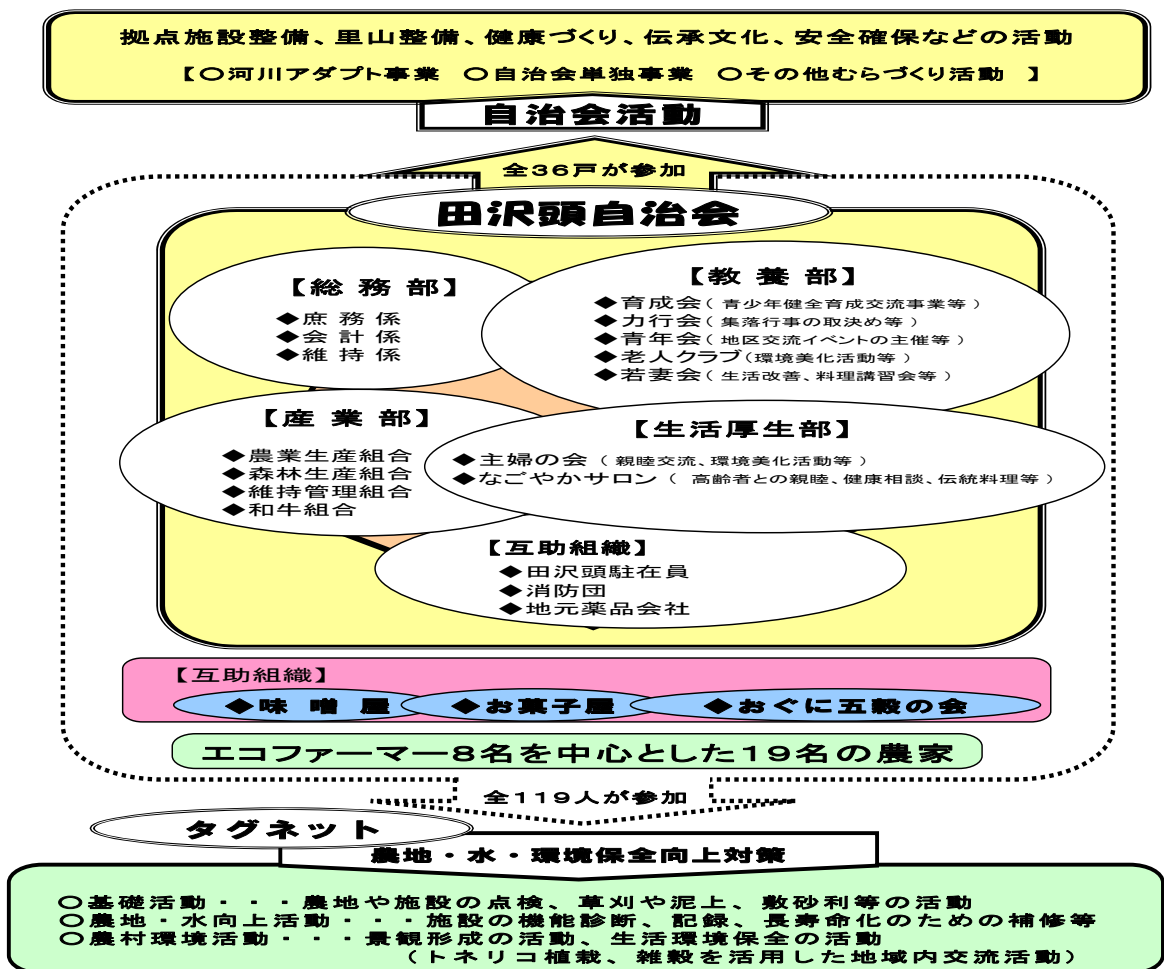
さらに、営農活動では、エコファーマーが特別栽培米「おぐに木酢米」を栽培しており、自治会の産業部は技術研修や販売促進の取り組みを行っている。

ウ その他の互助・連携組織

農家は平成4年に集落内に建設された地元薬品会社と連携し、その副産物である木炭と木酢液を活用した特別栽培米の生産を行っている。また、自治会が行っているため池周辺の環境整備も、地元で立地する各企業の協力を得ている。

さらに女性が中心となった雑穀に関する取り組みでは、おぐに五穀の会や東京の味噌屋などと連携し、6次産業化を目指している。

第2図 むらづくり推進体制図



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

自治会はこれまでの30年間、「みんなでつくろう なごやかなむら」をテーマとし、その時々課題解決のための計画を策定し、①計画に基づいた各種事業の実施により活性化を図ること、②男女や世代を問わない活動への参加を基本理念として、全戸、全員参加のむらづくり活動に取り組んできた。

最近では、農地・水の導入を契機に、タグネットという非農家を含めた全員参加の組織をつくり、これまでの活動をさらに強化し、地区内の子どもから高齢者、各種団体、地元で立地する企業までの全員が参加するむらづくり活動へ引き継がれている。

小さな活動をコツコツと積み重ねている自治会の取り組みは、県内の多くの山間集落のモデルとなっている。

2. 農業生産面における特徴

(1) 農業生産面の現状と新たな集落連帯の取り組み

地域農業の振興と集落内の連帯感の強化を目的に、秋には食味品評会を兼ねた収穫感謝祭を開催している。農家・非農家を問わず住民みんなが参加しており、地域全体の取り組みとなっている。

現在、集落内での販売農家は17戸だが、このうち専業農家はわずか1戸だけであり、第2種兼業農家は12戸と全体の約7割を占めている。また、22人の農業就業者の平均年齢は67.9歳と年々高齢化が進み、離農者や耕作放棄地の増加が懸念されている。

このため、農地・水の導入を契機に、まずは農地利用改善団体を設立し、その後、集落営農組織の立ち上げを目指している。将来的には、この組織を法人化することなども計画しており、後継者の確保につながることを期待される。

(2) 地元企業と連携した「おぐに木酢米」の取り組み

「おぐに木酢米」とは、木炭や木酢液、有機肥料の活用により、化学肥料や農薬の使用を抑えて生産した特別栽培米であり、地元企業と連携しながら、環境にも配慮した安全・安心な米づくりを行っている。

この取り組みは、地元にあるものを活用して、より付加価値の高いお米を生産しようと、昭和60年頃から集落内の一部の農家が始めたもので、当時は町内外から木炭・木酢液を仕入れ、試行錯誤しながら取り組んでいたが、平成4年からは、集落内に建設された薬品会社の副産物である木炭や木酢液を活用し、技術指導も受けながら徐々に生産を拡大してきた。



写真3 木酢米の生産

現在は、8名のエコファーマーが地元企業のノウハウやこれまでに培ってきた技術を活かしながら、木酢米の生産を行っている。

木酢米は、もともと直販用として生産されていたが、地元薬品会社の販路を通じ、関西方面へも出荷されるようになった。また、平成7年にはおぐに木酢米の宣伝として、自治会の産業部が消費地へ出向き、幼稚園や小学校の校庭で餅つきを行うなど、子ども達や米屋との交流を行った。

現在も、関西方面を中心とした米屋との取引は継続しており、このほか消費者への直販やJAを通じた取引を行っている。また、このような多様な販路の確保により生産が拡大し、地区内の水稲作付面積の8割を木酢米が占めている。

(3) 母ちゃんパワーで雑穀栽培 ～雑穀栽培による新たなむらづくり～

田沢頭集落では、女性たちが中心となり、遊休農地を活用して、約5反歩の畑で雑穀の栽培を行っており、雑穀を活用した商品や創作料理の開発など、6次産業化に向けた取組みも行っている。

この取組みは、農地・水の導入にあたり女性たちから、自分たちでも作業が可能な雑穀を栽培することで、集落内の遊休農地を解消し、収入の確保にも結び付けたいという積極的な提案がきっかけとなり始まったもので、新たなむらづくり活動として特に力を入れている取組みである。

ア 遊休農地を活用して集落内を綺麗に！

雑穀の栽培は、田沢頭集落をはじめ、小国町の各農園で取組まれており、おぐに五穀の会が中心となって、町内で栽培する雑穀の種類や生産量の調整を行っている。田沢頭集落では、一番需要があるタカキビや手間が多く掛かるアマランサスなどを生産しており、母ちゃんの元気なパワーで町内一の生産量を誇っている。

また、この畑の一部を、タカキビ、キビ、アワ、ヒエ、ハトムギ、アマランサスなど各種雑穀の展示ほ場として活用し、みんなで管理を行っており、景観形成にも一役買っている。



写真4 雑穀展示ほ場

イ 雑穀料理でおもてなし

雑穀はただ栽培するだけでなく、雑穀を活用した創作料理やレシピ作りにも積極的に取り組んでおり、ここでも「母ちゃんパワー」が発揮されている。

現在は、試験的な試みとして試食会を行ったり、田沢頭を訪れた視察者への昼食として年間300食程度提供しており、最近ではお祭りやイベントでの販売も行うようになった。

この取組みによる収入は、まだ実質的な利益を上げるまでには至っていない

が、今後、女性たちの収入確保につながっていくことが期待される。

また、試食会等で出された意見などを参考にしてメニューも拡大し、料理の腕前も上達しており、今では、お母ちゃんたちが集落外へ出前講座に出かけ、雑穀料理の講習会を行うほどになった。

こうした取組みなどによって、田沢頭集落を発信源として町全体に雑穀料理が普及し、町の活性化にも貢献している。



写真5 雑穀料理講習会

ウ 夢ふくらむ雑穀産業 ～6次産業化、そして宇宙への飛躍～

集落内で収穫した雑穀は、農業振興公社に加工を委託し、焙煎したりポップすることにより、お菓子屋さんが原料として使ってくれるようになった。地元のお菓子屋さんと連携して雑穀菓子を商品化するなど、6次産業化に向けた取組みを模索している。

また、小国町に旅行に来ていた東京の味噌屋さんとの偶然の出会いから、雑穀を原料にした「味噌クッキー」が商品化され全国で販売されるなど、人との出会いを活動の拡大につなげている。

さらに、このことがきっかけとなって、東京の味噌屋さんとベンチャー企業が行っている「宇宙大豆プロジェクト」に参加することになり、平成22年5月に小国産の大豆と雑穀がスペースシャトルで宇宙に飛び出した。

平成23年3月には地球に帰還し、その後、町内で栽培されることになっており、「宇宙大豆」や「宇宙雑穀」を活用した商品開発も計画されている。

この栽培は、地区内の親子農園や地元の高校でも取り組むこととなっており、子ども達を巻き込んだ夢のある取組みとして期待されている。

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) どこにも負けない団結力「結い」の精神

集落内のむらづくり活動にあたっては、「大変ではなく、当たり前」の気持ちで臨んでいる。また、「隣り近所の助け合い、きずな」などの意識も強く、他の集落に劣らない団結力「結い」の精神が根付いていると自負している。

農地・農道の草刈り、農業用水路等の泥上げ、施設の点検補修などの作業を、春と秋に全戸共同で行っており、これも農業者と自治会が連携し取り組む大切なむらづくり活動となっている。

(2) 美しいむらづくりへの取組み

ア 守れ！チョウセンアカシジミ

チョウセンアカシジミとは、岩手県、山形県、新潟県の限られた地域に分布する希少なチョウで、トネリコの木を主な食樹としている。このチョウはレッ

ドデータブックの絶滅危惧Ⅱ類に指定されており、山形県の天然記念物にも指定されている。

集落内には、以前から個人的にチョウセンアカシジミの保護活動を行っている方がおり、他の住民からも環境保全の取組みとして重要との提案があったことから、自治会として保護活動に取り組むことになった。

具体的な取組みとしては、集落内に自生しているトネリコの木の下草刈りや雪囲いを行うとともに、新たに集落内3ヶ所に150本のトネリコの幼木を植栽し、長期的に生息できる環境の整備を行っている。



写真6 トネリコの植栽
(写真右下がチョウセンアカシジミ)

イ 集落のシンボル「なごやかパーク」の整備

田沢頭集落は、昔から水不足に悩まされてきたため、集落の宝として大切にしてきた「田沢頭ため池」とその周辺を集落のシンボルとして、樹木の植栽や遊歩道の整備、コイやフナの放流などを住民の手で行ってきた。

平成5年からは地元企業等の援助を受けながら、つり橋や駐車場等も整備し、手作り公園「なごやかパーク」として、小学校児童の遠足コースや遊歩道として活用されており、現在も住民の憩いの場となっている。

ウ 花いっぱい運動

田沢頭集落への入り口には、大きな手作りの立て看板を設置し、その下を美しく花で飾りながら道行く住民や地区外からの来訪者を温かく出迎えている。

また、老若男女みんなで農道沿いの花の植栽やプランターへの花植えを行い、毎年、集落内をいっぱいの花で飾っている。

なお、これらの活動は、タグネットによる農村環境向上活動として、自治会の教養部や生活厚生部が中心となって取り組んでいる。

(3) なごやかなむらづくりへの取組み

ア 親子農園・ふれあい農園の開園

自治会では、「農業者の高齢化に伴って農作業ができなくなり、荒れた状態で放置されている農地を活用したい」という住民の提案をもとに、遊休農地を活用して親子農園とふれあい農園を開園し、農作業体験などの交流活動を行っている。

親子農園は開園して4年目になり、集落内だけでなく小国町内に在住する親子約30名が定期的集まり、農作業体験や料理教室などに取り組んでいる。これらの活動を通して、食育の推進やコミュニケーションの強化が図られている。

また、平成 22 年に開園したふれあい農園では、町内企業の従業員や県外からの転勤者に農業体験の場を提供しており、地域住民が農作業の指導を行うことにより、体験を行う方々との交流が図られている。

今後、これらの取組みが定着・拡大していくことが見込まれ、将来的には定住人口の増加につながることを期待されている。



写真 7 親子農園

イ 高齢者とのふれあい

自治会の生活厚生部が取り組む「なごやかサロン」では、地域の高齢者と若い住民と一緒に料理を作ったり、楽しい時間を過ごしながらか親睦を深めている。

この活動は、高齢者とのふれあいによって、地域の伝統料理や匠の技などを継承していくことに役立っている。

また、婦人グループを中心とした料理講習会などは、地区住民の健康で潤いのある暮らしづくりに役立っている。

(4) ますますの発展を目指して！

交流活動の実践や人材（リーダー）育成のため、県内外からの視察や研修等を積極的に受け入れ、お互いのむらづくり活動について発表しながら、意見交換を行っている。

研修会での発表や説明にあたっては、説明者を限定せずに、多くの住民が分担し対応することにより、人材の育成に努めている。